

中国東北部（旧満洲地区）における未発見映画フィルム発掘 及び関係者聞き取り調査報告Ⅱ

志村 三代子

はじめに

筆者は、2003年の2月14日から2月21日まで中国東北部（旧満洲地区）において、長春市を皮切りに戦前の未発見日本映画の発掘及び関係者聞き取り調査を行った⁽¹⁾。計2回にわたる調査で確認された点は、戦前の未発見フィルムが今後の調査次第で中国で発見される可能性が期待できることである。

前回の聞き取り調査で『満映 国策映画の諸相』の著者・胡昶氏、吉林省社会科学院日本研究所、東北淪落十四年史総編室副主編の李茂杰氏の情報により、ハルピン在住のコレクターが所蔵する日本軍、あるいは日本のメディアが撮影したと思われるフィルムの所在をつきとめた。中国人が「日本」による記録映画を発見保管している例はきわめて珍しい。今回は、この記録映画の内容を確認するため、胡昶氏の仲介により、小松弘教授、研究協力者の佐藤秋成氏とともにハルピン在住のフィルム所有者のもとに伺い、テレシネされた映像を鑑賞した。詳細は以下の通りである。

「日本」による記録映画について

(2003年12月24日 ハルピン在住のフィルム所有者・尚玉再氏の事務所にて鑑賞)

1. フィルム所有者

尚玉再氏（50歳代）。電力設備関係の仕事の傍ら、副業で自宅近くのハルピン古玩城（骨董街）で骨董品店を営んでいる。

2. 入手経緯

尚玉再氏が10年前にハルピンの露店で入手。以前、共産党のシンクタンク（おそらく吉林省社会科学院）に紹介したものの、フィルムを購入する経済的余裕が無く、フィルムの内容についての学術的な研究に興味を示すこともなかった。日中の政治認識の相違から、今まで日本人にフィルムについての情報を提供することはなかったが、今回胡昶氏の厚意により、我々日本人にはじめてフィルムを見せることとなった。

3. フィルムの形態

フィルムはオリジナル16ミリフィルム。本作はフィルムの断片を集めて北京映画撮影所で編集したものをテレシネした記録映画（無声版、画面説明の字幕が時折挿入される）である。

4. フィルムの内容

尚氏の画面解説を交えながら、テレシネされたデータをパソコン画面上で鑑賞する。ただし、一度きりの鑑賞であり、画面を観ながらメモを取ったことから、詳細な映像分析は不可能であることを断っておきたい。なお、フィルムナンバーとそれに続く小番号及びタイトル名は、同じ作品であると思われる断片に対し、筆者が任意につけたものである。

フィルムナンバー① 満洲開拓団ハルピン訓練所

1-1 土木工事現場

ハルピンの発電所近辺での作業員たちの勤労奉仕を撮影したもの。スコップで土を掘る土木作業の様子がロングショットで写されている。

字幕<作業はいよいよ完成に近づく>

字幕<ハルピン訓練所>

1-2 整列した兵士が体操する

当時満洲に二つあった青年義勇兵の訓練所などのシーンが写されている。

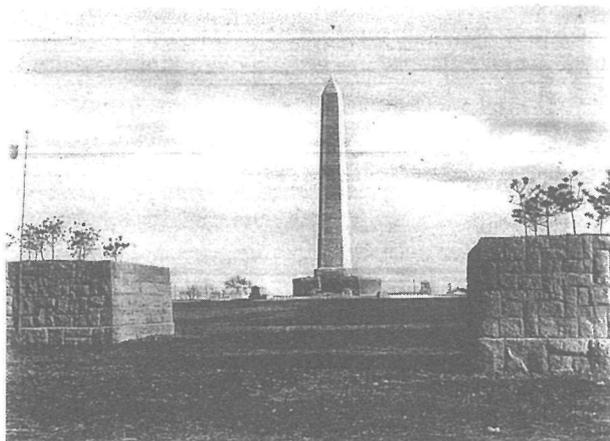
1-3 発電所の全景を写したショット

フィルムナンバー② 参拝忠霊塔（参考写真①）

戦没者の忠霊塔を参拝する人々（要人や兵士、看護婦など多数）を撮影したもの。

1-4 防衛訓練後の列兵式

字幕<防衛訓練を経て順列式>



参考写真① 当時のハルピン忠霊塔
（『哈爾濱と風俗 現地写真集』より抜粋）



参考写真② ハルピンの孔子廟

フィルムナンバー③ ラマ教の寺院（現在は取り壊されて存在しない）

フィルムナンバー④ ハルピン工業大学の玄関

フィルムナンバー⑤ テニス場面
満洲開拓団たちの日常生活を紹介したもの。

フィルムナンバー⑥ 孔子廟参拝（参考写真②）

6-1 満洲事変の記念日に孔子廟に参拝する日本人、民族衣装を着用した中国人の行列を写したもの。尚氏によると、当時の日本人の孔子信仰は厚く、この日本人の参拝が最後となったそうである。

6-2 記念植樹

1-5 整列した兵士が体操する（満洲開拓団ハルピン訓練所の続き。テレシネした際に順番が狂ったものと思われる）

1-6 器具の点検
作業員たちが土木器具の点検をする

字幕<作業開始出発！>

1-7 トラック乗車
作業員たちが一斉にトラックに乗り込む

字幕<われらの町はわれらの手で>

1-8 道路工事場面
当時使われたバスが写される。

字幕<馬山溝？>（字幕判読出来ず）

フィルムナンバー⑦ 児童京劇団

7-1 役者のメーキャップ、仮面を被る

7-2 舞台風景（孫悟空の実演を撮影したもの）

フィルムナンバー⑧ 撃滅美英国

「鬼畜米英」のローガンが記された漫画の展示会。ルーズベルトが戯画化されたポスターの展示と、それを笑う子供たちのクロースアップがクロスカッティングで編集されている。

「大東亜戦争」と書かれたポスターが写される。

フィルムナンバー⑨ 徐州攻略（満映撮影・大東亜戦争ニュース第19）*タイトルあり

9-1 戦闘

銃撃シーンを撮影

満洲国国旗が戦場で翻る

9-2 船上

日本軍艦が集結し、海軍要人が日本軍艦に敬礼。

フィルムナンバー⑩ 鴨狩

海岸で鴨が捕獲される

フィルムナンバー⑪ 集団舞踊

日本と満洲の国旗を背後に少女たちが踊りを舞台で披露する

フィルムナンバー⑫ 開拓団の子供たちの伝染眼病検査風景

5. 所見

フィルムは内容ごとに分類すると、およそ12の断片から構成されている。これらの断片の正確な製作年を確定することは困難だが、フィルムの内容から撮影場所と撮影時期の一部が推察される。まず、断片の多くは満洲開拓団ハルピン訓練所の訓練の様子が撮影されたものである。1932年の「満洲国」の成立以降、日本から数次にわたって試験移民が実施されてきたが、1937年度からは「20ヵ年100万戸送出計画」に基づき、一戸当り五人、500万人の定着を見込んで本格的な送出が目指された⁽²⁾という。フィルムナンバー①のハルピン訓練所の作業員たちが青年であり、また、これらの青年を尚氏が「青年義勇兵」と説明していることから、フィルムナンバー①は、1938年から45年にかけて、徴兵適齢前（数え年16～19歳）の男子を募集対象とした「満蒙開拓青少年義勇軍」の活動を撮影したフィルムの可能性が高い。さらに、フィルムの発見場所がハルピンであり、またハルピンで撮影されたものが多数を占めている（フィルムナンバー①、②、③、④、⑥）ことから、フィルムナンバー①は、1938年以降のハルピンにおける現地訓練所の活動を記録したものであると推察される。

徐州攻撃を扱ったフィルムナンバー⑨は満鉄映画製作所⁽³⁾においても1938年に『徐州会戦』が製作されてい

るが、冒頭に「満映撮影・大東亜戦争ニュース第19」とタイトルが示されているため、⑨が「満洲映画協会」（満映）によって撮影されたものであることはほぼ間違いのない。この他にも、「撃滅美英国」の字幕が確認されたフィルムナンバー⑧に「大東亜戦争」と書かれたポスターが写しだされている。そもそも、この「大東亜戦争」という言葉は、日米開戦後の1941年12月12日の閣議決定で正式に命名されたものであるため、フィルムナンバー⑧、⑨は、1941年の12月12日以降に公開されたものである。だが、日本軍による徐州占領は、実際には1938年5月29日である。3年以上も前のニュースソースを「大東亜戦争ニュース第19」というタイトルで公開することは、いささか奇妙なことのようと思われるが、当時の満映の時事映画に対する方針を鑑みれば、全く不可解なことではない。

初期の満映では、記録、教育、宣伝、時事映画は文化映画として一括りにされ、製作部の文化映画課が制作を指揮していた。だが、1939年11月1日に甘粕正彦が満映理事長に就任すると、甘粕による第一時機構改革で時事映画課が設けられ、時事映画が独立して制作されることになった。しかしながら、40年12月の第二次機構改革において、文化映画を製作部から独立させるとともに、文化映画は啓民映画と改称された⁽⁴⁾。つまり、この時期の満映の啓民映画部には啓発課と時事課があり、再び時事映画が啓民（文化）映画にカテゴライズされたということである。したがって、時事映画は、単なるニュースを扱ったものではなく、啓蒙的な意味付けがなされていたのだ。この「大東亜戦争ニュース第19」として公開された「徐州攻略」も正確には時事映画ではなく、「大東亜戦争ニュース」として時事映画にみせかけてはいるものの、その実態は関東軍の過去の戦果を喧伝する「啓民映画」なのである⁽⁵⁾。

満映は、甘粕正彦の理事長就任以降、啓民映画が重要視され、「満洲国」国民の教育・指導や満洲国内外の宣伝・広報活動において威力を発揮したが、甘粕の就任以前にも独自の製作方針が企図されていた。例えば、1939年の1月11日に実施された日本の同盟通信社とのニュース交流において、雑誌『満洲映画』は次のように述べている。

交通（アジア号、航空網）、産業（森林伐り出し、大豆その他の農業状況、鉱山、重工業）、地理（広漠たる平野を示す空中写真、黒竜江中心の民族及び風俗、国都新京の状況、吉林その他都市の風景）、住宅（白系ロシア人、日本移民村、満人部落、その他）軍備（満洲国軍の威容）、文化（学生生活、婦人の生活）スポーツ（ホッケー、スケート等を中心に）、自然（満洲特有の動植物）、年中行事（満洲の風景をバックにした宮殿、寺院、民衆、近代建築）等に焦点を合わせたい意向である。政治的分野に於けることも日満不可分関係から同盟側としてもやはり重要だ。更に今後のニュース映画は単にスリルばかりを持ったものでなく、従ってスナップ式なものでもなく

何等かの筋を持たせて、観客にアピールする製作企画を強調したい⁽⁶⁾。

つまり、満映は、「満洲国」に関するありとあらゆる情報を提供するとともに、「何等かの筋を持たせて、観客にアピールする製作」を意図していたのだ。さらに、満映は同盟通信との提携後、「満映月報」を毎月1本ずつ製作することで、時事映画の機能を強化した。この「満映月報」は、「満映ニュース、同盟ニュースは勿論満映製作部で撮った文化映画素材の中より民衆宣撫及び記録価値あるものを抜粋編集し、日満両語のトーキー版2種類満語タイトルを附したサイレント版一種の3種類を月一本製作7」したのである。今回鑑賞した断片の中にも、地理（⑩）、文化（③、④）、スポーツ（⑤）、年中行事（③、⑥）などが含まれており、これらが「満映月報」の一部である可能性はあるだろう。なかでも「満蒙開拓義勇団」を描いたと思われるフィルムナンバー①は、土木工事現場のシーンに始まり、数度にわたる字幕挿入の後、義勇軍の体操、発電所の偉容を誇示するフルショット、列兵式、土木器具の点検とトラックに乗り込む義勇軍の姿を写し、再び冒頭の道路工事に汗を流す義勇軍の青年たちが撮影されている。しかも、これらの作業員のなかにはロシア人の少年の姿が写されているのだ。尚氏によると、当時のロシアは満蒙開拓に友好的で日本人はロシア人に対して一切警戒しなかったという。真偽のほどはさておき、これらの映画は、〈われらの町はわれらの手で〉というラストの字幕により、「満蒙開拓」という既成事実の物語性を持たせることで、「満蒙開拓青少年義勇軍」の宣伝及び徴募を強力に訴えているといえるだろう。また、フィルムナンバー⑧は、ルーズベルト大統領がカリカチュアライズされたポスターが写され、続いてそれを笑う子供たちのクロースアップがクロスカッティングで巧妙に編集されている。これらの「鬼畜米英」を正確に写しだした断片と、フィルムナンバー⑩における日本国と「満洲国」の少女たちの集団舞踊を続けてみれば、子供たちによる「鬼畜米英」と「日満親善」があたかも忠実に実行されているように受け取られるだろう。

今回ハルピンで鑑賞した映画の断片が「大東亜戦争」の勃発間もない頃に公開されたものであれば、それらが公開された時期は、満映の「啓発」と「時事」が未だ分化されていない啓民映画の萌芽期であるとともに、「大東亜共栄圏」の実現に向けて、製作が強力に推し進められた直中であつたと考えられる。だからこそ、「満蒙開拓青年義勇軍」を扱った宣伝映画、あるいは「徐州占領」といった過去のイベントを時事映画のごとく編集するフィルムなどのように、様々な意匠を凝らしたフィルムには、たとえバラバラの断片であっても「満洲国」の正統性を主張し続ける強烈な意思が垣間見えてしまうのである。

注(1) 報告の詳細については志村三代子「中華人民共和国東北部（旧満洲地区）における未発見映画フィルム

発掘及び関係者聞き取り調査報告」「演劇研究センター紀要」I、早稲田大学 21 世紀 COE プログラム、2003 年 3 月を参照されたい。

- (2) 白鳥道博「解題」『満蒙開拓青少年義勇軍関係資料 第 1 巻』不二出版、1993 年、1 頁。
- (3) 満洲国当局は、内外宣伝の必要性から文化映画をきわめて重視していた。例えば、1917 年から始めたとされる満鉄沿線の「映画巡回」の活動を経て、23 年に設立された満映映画班の設立があり、さらに 1931 年の「満洲事変」の勃発以降、1936 年 10 月には名称を「映画製作所」へと改め、人員・機材の拡充が図られた。そして「満洲映画協会」が設立されたのは、1937 年 7 月 7 日の蘆溝橋事件直後の 1937 年 8 月 21 日である。満映の資本金を満洲国政府と折半し、満鉄から早川一郎、浜田新吉などのカメラマンらが入社したことからも明らかなように、満映は満鉄映画製作所を母体として設立されている。(小関和弘「満鉄記録映画と「満洲」——異郷支配の視線」岩本憲児編『映画と「大東亜共栄圏」』森話社、2004 年、42～54 頁) 満映が設立されて以後も、満鉄は独自に映画製作を続けていたため、明らかに満映撮影であるフィルムナンバー⑨を除き、その他の断片も全て満映撮影のものなのかといえ、それは一概に断定は出来ないだろう。
- (4) 43 年 6 月 1 日の機構改革で時事映画が啓民映画から再び独立することになる。
- (5) 『関東軍映画其一』(監督編集・高橋紀、日本語版) 『関東軍映画其二』(監督編集・三谷繁一、日本語版) 『威風凛々之日本陸軍』(監督編集・島田太一、満語版) が一九四一年に公開されているが、この断片であるかどうかは不明である。
- (6) 「満映・同盟のニュース交流実現す」『満洲映画』第 3 巻第 3 号、1939 年(康德 6 年) 23 頁。
- (7) 『満洲映画』第 3 巻第 5 号、1939 年(康德 6 年) 78～79 頁。